氏　　名	アリ ヴォルカン エルデミール Ali Volkan Erdemir
学位(専攻分野)	博　　士（人間・環境学）
学位記番号	人　博　第　359　号
学位授与の日付	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科共生文明学専攻
学位論文題目	The Japanese View of Turkey during the *Meiji* Era : A Study Focused on *Torajirō Yamada* （明治日本におけるトルコ観—山田寅次郎を中心に）
論文調査委員	（主　査） 教授 稲垣直樹　　教授 松田　清　　助教授 多賀　茂

論　文　内　容　の　要　旨

世界各地域で形成されたトルコ観についての研究は枚挙に遑がないが，日本のトルコ観については，ほとんど調査・研究が行われていないのが実情である。The Japanese View of Turkey during the *Meiji* Era : A Study Focused on *Torajirō Yamada*（明治日本におけるトルコ観—山田寅次郎を中心に）と題する本論文は，トルコと日本の交流の初期，明治期の日本におけるトルコ観を扱い，その形成の中心的な人物である山田寅次郎（1866～1957）を軸として，このような空白を埋めることを企図したものである。本論文は第1章「山田寅次郎とトルコ」，第2章「日本人短期滞在者の眼から見たトルコ」，第3章「雑誌『太陽』が一般に広めたトルコ観」の3章より成る。

第1章「山田寅次郎とトルコ」では，日本の知識人かつ実業家の山田寅次郎がその22年に及ぶトルコ滞在（1892～1914）によって，いかなるトルコ観を持つに至ったかが示される。それに先だって，日本でトルコが初めて本格的に知られるようになった海難事故が紹介される。1890（明治23）年，日本を公式訪問したトルコの軍艦エルトゥールル号が帰路，和歌山県沖で難破し，その乗員を地元住民が献身的に救助した。遭難者に対する義捐金が日本各地から集められ，この義捐金をトルコに届けた人物の一人が山田寅次郎であった。山田はもともと沼田藩の家老の家に生まれ，茶道宗徧流の家元，山田家に養子に行った人物である。青年期より英語・フランス語・ドイツ語・中国語を学び，国際的な感覚を身につけていた。トルコ（土耳古）に渡った山田は通算22年間イスタンブールで日土貿易を行う商館を営んだ。オスマン帝国末期のトルコにおいて日本を代表する人物となり，第34代スルタン，アブデュルハミト2世（在位1876～1909）にも謁見した。

山田の著書『土耳古畫觀』（博文館，1911），雑誌『太陽』掲載のトルコ関連記事・論説，さらには，徳富蘇峰宛の書簡などの一次資料に山田のトルコ観を申請者は探っている。山田自身が現地で実際に観察した事物，トルコ人からの伝聞などの直接的情報に加えて，西欧諸語文献図書の読解から得た間接的情報を基に，食事，祭日，入浴などの日常生活から，商習慣，歴史，宗教，政治，経済，国際情勢に至るまで山田は具に分析し，論じている。西欧が恣意的に形成したステレオタイプを警戒し，能う限り客観的，実証的視点を確保しつつ，日本や西欧の文物との比較による比較文化的異文化理解の方法を山田が駆使していることが明らかにされる。また同時に，特に歴史的事象の評価や政治問題については，山田が西欧の価値観から自由になってはいない限界も指摘される。

第2章「日本人短期滞在者の眼から見たトルコ」では，主として山田の知遇を頼りにトルコに短期滞在した日本の知識人，朝比奈知泉（1862～1939），徳富蘇峰（1863～1957），徳富健次郎（1868～1927）の三人のトルコ観が取りあげられる。朝比奈は1896年に12日間トルコに滞在し，トルコに関する論考を『老記者の思ひ出』（中央公論社，1938），論説「東欧問題」「土耳其」（『朝比奈知泉文集』，朝比奈知泉文集刊行会，1927収載）に記している。東京日々新聞の編集主幹を務め，ジャーナリストである朝比奈は現地での取材に重きを置き，通訳を介してトルコ人から直接情報を得ることにも腐心した。国際法ないし国際慣習に照らし，公平を旨として，むしろヨーロッパ諸国に批判的な態度をもってトルコ情勢を論じた。徳富蘇峰は1896年に9日間トルコに滞在し，その見聞を大隈重信宛書簡4通（杉井六郎『徳富蘇峰の研究』，法政大学出版会，1977

収載）に認めている。ヨーロッパ諸国の視点からトルコ情勢を見る傾向が強く，「残酷なトルコ人」のイメージを増幅する嫌いがあることは否めない。徳富健次郎は1906年にトルコに34日滞在し，その見聞を『順禮紀行』（警醒社，1906）に記している。事前の調査が充分でない上に，現地で特に熱心に情報を集めることもせず，風景や風物から得た印象を述べる程度である。トルコを開発途上国とのみ認識し，自らのエキゾチシズムを満足させることにほとんど終始している。

第３章「雑誌『太陽』が一般に広めたトルコ観」では，雑誌『太陽』に掲載された，多数のトルコの写真が分析される。それらの多くは風景，名所旧跡，トルコ女性，トルコ人の服装，トルコ帽を被り髭をたくわえた政界の重要人物たちなど，読者のエキゾチシズムに対応したステレオタイプであった。『太陽』掲載論説において顕著なのはオスマン帝国の凋落を強調する論調であり，これには，西欧列強に伍して富国強兵を推進する自国についての自負の念が見て取れるとされる。

以上のように，トルコと日本の両文明が出会って間もない明治期の日本のトルコ観が具体的な事例に基づいて検証されている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

トルコと日本の関係，とくに19世紀後半，両国間に国交が開かれて以来，日本人がトルコについてどのような知識を得，どのような交流を持ち，どのようなイメージを形成したかについて，研究が皆無に等しいというのが実情である。トルコと日本の両国において，トルコ語と日本語の双方の文献について調査研究を行い，明治期の両国の交流に関してこの空白を埋めようとし，それにかなり高いレベルで成功しているのが本論文の最も評価されるべき点である。トルコ語を母語とし，日本語に堪能なトルコ人であるという申請者のような研究者でなければ成しえない研究と言える。

その性質上，本論文は日本において日本人が参照するよりも，トルコにおいてトルコ人が，あるいは国際社会において日本語に堪能でない研究者が参照する機会のほうがむしろはるかに多いと思われる。そのことを考慮して本論文は英語で執筆され，国際社会に向かって開かれた論文となっていることも特筆すべきである。

このようなテーマについて英語論文を執筆するに当たっては，多大の労力と忍耐力を要することは想像に難くない。山田寅次郎著『土耳古畫觀』，雑誌『太陽』掲載トルコ関連記事・論説を始めとする，明治期の日本語文献を英訳することは，申請者にとって，母語であるトルコ語文献を英訳する作業とは比べものにならない困難を伴うものである。日本において，ジャーナリズムなどの一般レベルで言文一致が確立するのが大正末期から昭和初期にかけてのことである。明治期の日本語は用字用語，さらには文体についても現代日本語とかけ離れたものであった。加えて，徳富蘇峰および生方たつゑ宛ての山田寅次郎の書簡については，直筆の文面を解読する必要も生じた。これら数多く引用された，明治期日本語文献資料の明快な英訳のみならず，それらの日本語原文の（旧漢字，旧仮名遣いを原典どおり用いた）転記，直筆書簡の解読・翻字，さらには，直筆書簡の写真，雑誌『太陽』収載写真等の充実した画像資料も，緒に就いたばかりとも言える日土交流史研究の今後の発展に多大の貢献をすることも容易に推測できる。

本論文を構成する第１章「山田寅次郎とトルコ」，第２章「日本人短期滞在者の眼から見たトルコ」，第３章「雑誌『太陽』が一般に広めたトルコ観」の３章のいずれにおいても，詳細な文献資料調査に基づいた精緻な分析，実証性のきわめて高い，行き届いた論考が展開されている。

まず文献資料調査については，山田寅次郎がアブデュルハミト２世に贈ったとされる実父遺愛の甲冑・刀剣など，イスタンブールのトプカプ宮殿資料館等での調査を始めとして，数度にわたるトルコでの現地調査を敢行している。また，日本においては，茶道宗徧流の家元宅，財団法人徳富蘇峰記念塩崎財団，生方記念資料館，群馬県国際課（旧沼田藩関連資料調査）に出向いて現地調査を行っている。これらの調査から直接得られた一次資料に加えて，雑誌『太陽』のバックナンバーなどの膨大な図書資料を渉猟している。

第１章「山田寅次郎とトルコ」においては山田寅次郎，第２章「日本人短期滞在者の眼から見たトルコ」においては朝比奈知泉，徳富蘇峰，徳富健次郎の三人，第３章「雑誌『太陽』が一般に広めたトルコ観」においては雑誌『太陽』の執筆陣が行った，イスタンブールの風景，食事，祭日，入浴などのトルコ人の日常生活から，商習慣，歴史，宗教，政治，経済，国際情勢に至るまでの多岐にわたる記述を，精通している母国トルコの気候風土，地理，歴史，都市構造等についての豊富で直接的な知識に照らして，批判的かつ実証的に吟味している。これらの記述の情報源が，それら日本人知識人の現地での

観察，トルコ人からの伝聞といった直接的なものであったか，あるいは，西欧諸語文献図書から得た間接的なものであったかといった情報源の性質と信憑性についての検証も怠りなく行われている。そのうえで，個々の日本の知識人がどの程度の質の情報を保有し，どのような点で西欧列強の偏見に捉えられ，また，どのような点で，それから自由な独自の判断を行っていたかを看破している。トルコに長期間在住した山田寅次郎，そして，ジャーナリストとしての客観的判断を旨とした朝比奈知泉は概ね，西欧が恣意的に形成したステレオタイプを警戒し，能う限り客観的，実証的視点を確保しようとした。トルコに対する通り一遍の関心しか抱かなかった徳富蘇峰と徳富健次郎は，西欧のフィルターを通してトルコを見る傾向が強かった。雑誌『太陽』掲載記事・論説は総じてトルコについてのステレオタイプの増幅といった性質を拭いえないことが明らかにされる。

以上のように，本論文は，明治日本のトルコ観を山田寅次郎を軸に，きわめて実証性の高い方法で分析し，その全般的特徴とその限界を明示した先駆的なものであり，本研究科共生文明学専攻比較文明論講座にふさわしい内容を備えた研究成果と判断される。

よって，本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成19年１月15日，公聴会において，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。